

# 難民という人生 チョウ・チョウ・ソーさんに聞く

人の痛みに敏感に ミャンマーへ郷愁募る

2013年4月20日 帰れる日のために能力を磨く



ミャンマーの民主化運動指導者、ウン・サン・スー・チーさんの来日に合わせ、東京・東中野で1本の映画が上映されている。「異国に生きる」(土井敏邦監督)。軍事政権の弾圧を逃れ、日本に渡ったミャンマー難民の人生を追ったドキュメンタリーだ。主人公のチョウ・チョウ・ソーさんはミャンマー難民のリーダー的存在。日本で民主化運動を続ける一方、一昨年の東日本大震災の際は大勢のミャンマ一人を集め、被災地でボランティア活動をした。

「民主化運動をしたことで多くのものを失いました。日本に来て22年ですが、一度も帰国できず、その間に両親は亡くなっています。自分のことだけを考え、日本で働き、お金をためて国に帰る生き方があったと思います。でもそれはできなかった。僕にとって一番大切なのは他人の痛みを感じることです。ビルマ(ミャンマー)にいる同胞が自由も豊かさも手にしていない時に、自分がチャンスを独り占めにすることはできません」

1988年の民主化運動に参加、身の危険を感じ、91年に来日した。

「当時、僕は会計士でした。軍事政権では国の未来はないと思い、運動に加わった。でも政権が弾圧に乗り出し、心配した父から『自分の息子が刑務所に入る姿は見たたくない』と言われた。そこでタイ経由で日本に逃れてきました」

「日本では建築現場や電気工事店、飲食店で働きながら民主化要求のデモや集会に参加しました。難民だから仕事を選ぶことはできない。生きるために手に入る仕事はなんでもやった。自分のやりたい仕事ではないから、最初はつらかった。でも、いつか帰れる日が来る。そのために能力を磨かなくてはいけない。日本は将来のための練習場と思って頑張ってきました」

**個人的な犠牲は承知の上で民主化運動をした**

言葉の問題もあり、日本での生活は大変だった。

「日本で苦労したことはたくさんあります。大変なのは部屋探し。当時は外国人にアパートを貸す大家は少なく、なかなか借りられなかった。作業現場で嫌な思いをしたこともあります。資材を置く場所を間違つてしまい、怒鳴られたのですが、日本人が同じことをしても怒られない。差別されていると思いました」

「日本に来た当初、家に電話すると、母は『会いたい、会いたい』と言っていました。でも3年目から、『元気か』としか言わなくなったりました。母も僕が帰ったら危険だと次第に理解したのです。結局、母とは二度と会うことはありませんでした。10年前に心臓の病気で亡くなり、葬式にも行けなかった。でもそれは仕方がないことです。民主化運動をして個人の人生に得になることはない。それを承知でこの道を選んだからです」

日本は欧米に比べ難民の受け入れが少ない。98年によくやく難民認定された。

「日本は難民に厳しい国なので、申請する時は不安でした。不認定になつたら捕まる可能性もあり、強制送還の心配もある。入国管理局の対応は厳しかった。『なぜ日本にいるのか』『何をしているのか』と矢継ぎ早に聞いてくる。そして言わされました。『お金を稼ぎに来たのだろう』と。初めから難民ではないと決めつけていた感じでした。日本で民主化運動をしていることを必死に訴え、何とか認めてもらいました」

「難民認定され、在留資格を得た時はうれしかった。妻を呼び寄せることができるからです。結婚して1年で日本に來たので、妻との生活は短かったです。妻は『早く帰ってきてほしい』とよく手紙を書いてきました。それがどんどん長引き、僕が帰国できないと知った妻は出国し、バンコクにいました。すぐに迎えに行きました。その日妻が作ってくれた手料理は一生忘れられません」

## 難民も日本社会の一員

東日本大震災の後、東北の被災地に向かった。

「テレビで被災地を見て何かしなくては、という思いに駆られました。僕たちには小さなことしかできない。でも強い気持ちでやろうと思いました。陸前高田に焼き出しに行くことを決めるとき、ビルマ人の仲間が次々に賛同してくれた。彼らの中には失業している人もいた。でも自分たちよりもっと大変な人がいるから助けたい、と言ってくれたのです。この後、石巻などでもボランティア活動を行い、被災地に3回行きました」

チョウさんが実践する利他の生き方は「人生とは何か」との重い問いを日本人にも投げかける。

「当時はもうビルマ料理店を開いていました。東北に行く準備をしていると、2階のお好み焼き屋のママさんが『ミャンマーの人たちも被災したの？』と尋ねてきた。妻が『いいえ』と答えると、ママさんはびっくりして『日本のためにありがとう』と言ってくれた。僕たちは日本人ではないけれど、日本で暮らすこの社会の一員です。困っている人がいれば助けるのは当たり前のことです」

「被災地では色々な人に会い、話をしました。僕は家や家族を失った人の気持ちがよく分かれます。なぜなら僕も自分の家に住めず、外国にいるからです。日本は避難所と同じで、仮の住まい。でも僕には祖国に帰るという希望があります。希望があれば生きられる。被災した人たちも早く希望を持ってほしい」

祖国の民主化進展でその希望が現実になりつつある。

「国の民主化は始まったばかり。確かに政権指導部は改革に向けかじを切ったが、末端まで浸透していません。スー・チーさんの話を聞いて祖国に帰ろうとの思いは強まつたが、まだ見極めなければならない」

ことは多い。本当に帰ることができたら、小学校の教師になって教育で国造りにかかわりたいと思います」

(編集委員 藤巻秀樹)

1963年ヤンゴン生まれ。ヤンゴン経済大学卒業後、会計士に。1991年に来日、飲食店などに勤めながら民主化運動をする。2002年、東京・高田馬場にビルマ料理店「ルビー」開業。02年から12年までビルマ民主化同盟代表。ビルマ語誌「エラワンジャーナル」編集長やNHKビルマ語放送アナウンサーも務める。